
現のち夢ときどき架空 うつつ のち ゆめ ときどき から

深海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現のち夢ときどき架空 うつつ のち ゆめ ときどき から

【Nコード】

N9075L

【作者名】

深海

【あらすじ】

お見合回数、二桁達成まであと少し。

そんな主人公、片桐紗柚は32歳独身。

お見合いの回数を重ねるたびに傷つき疲れ、この際自分と結婚してくれるなら誰でもいいとやけになりながら、お見合いをするようになっていった。

そんな紗柚が一人の男性と出会う。彼との出会いが、紗柚を変えていく。

紗柚の視点のみで描かれる独白小説。

序章

彼に愛されないけれど、彼を愛している自分。

彼は私にとって片翼なのだ。

比翼の鳥、それは愛するもの同士を指すけれど、全ての人が自分の片翼となれる存在を見つけれられるわけではない。翼が無くて飛べないだけで生きてはいける。飛べないけれど、別の人と結婚し家庭を作り家族を作り幸せになれるだろう。

彼となら私は翼を得て飛べるだろう。でも、幸せにはなれないとわかつている。

人は愛だけでは生きてはいけない。愛が無くては生きてはいけるけれど……。

飛ぶ必要など無いのだから。

第1章

終わった。

これが八回目のお見合だった。相手の名は早川 枢毅。
今回こそは結婚したい。

毎回そう望んではいるけれど、やはり現実はいまうまいきはない。
見合の回数を重ねるたびに、それなりに得られるものはある。

お見合い相手が結婚を本気で望んでいるか、親に圧しつけられているかはなんとなく察することが出来るようになった。それでも相手が結婚を本気で望んでいるのか見極めるにはある程度の時間は必要だ。

早川さんは、見合を親に圧しつけられているようだった。私との付き合いも上辺でしかなかった。結局、彼とは7週間の付き合いだった。交際期間は短いとも言えないが、今までのお見合い相手でデートの回数は一番多かった。会って特に何かをするでもなくかと言って彼との会話が盛り上がったわけでもなかった。ただ、一緒にいるのは楽しかったから、デートに出かけるのも億劫には感じなかった。

今日のデートの終わりに二人で本音を話し合った。

彼は恋愛結婚を望んでいて、この見合は親から圧しつけられたものだった。私のことも、正直に「抱く気にならない」と言われた。お互いに友情以上の感情を持てなかった。

結局、二人の関係を終わらせることになった。けれど、もう少し付き合ってみれば何かが変わったかもしれないとお互いが何かを感じて、別れを惜しんだ。私からもう少し付き合い合ってみないかと言出すことは出来なかった。勇気が無かったわけじゃない。ちっぽけなプライドが邪魔したのだ。終わらせると決めた以上は、自分の判断を信じたかったのだ。話しているうちに何かが変わったけれど、それに気付かない振りをしたかったのだ。

部屋に戻って一人になってしまうと、いろいろ考えてしまった。
愛情は無いけれど好意があれば結婚してしまってもいいと思っ
ている私にとっては充分すぎる相手だったけれど、相手は恋愛結婚を
望んでいた。

最初に本音で話していれば良かったのだろう。

お互いに話をしてきちんと向き合えば無駄に時間を過ごす事には
ならなかっただろう。

無駄……無駄に時間を積み重ねていけば、愛情は芽生えただろう
か？ いや、進展の無さに自分は飽きてしまっていただろう。

愛情はそんなに大切なものだろうか？

とにかく、結婚してしまいたい私にとっては嫌いでなければ誰で
も良かった。

翌日、パソコンをネットに繋げると、メールが届いていた。ファ
リイというサイトからメッセージの受信があるという内容だった。
ファリイは、私が最近登録した中日交流・交友のコミュニティー
サイトだ。そこでは、中国人や中国語を勉強している人と交流出来
る。

早速、ファリイに接続し、メッセージの確認をすると、友人の一
人である藍からだった。目に飛び込んできたのは、

彼女とやり直すことになりました。

なんてタイミングの悪さ。私は昨日振られたばかりだというのに
……いや、振られたわけではなく話し合っただけだろうけど
……心境としては、やはり振られたという言葉がびったりくるわけ
で、妬ましさや羨ましさ、そういう感情が浮かんてくる。

私の事情は彼にはもちろん関係ない。自分の感情は抑えて、返信
のメッセージに

頑張ってください。

とただ一言添えた。

フアリイで私のニックネームはk o aだ。

ネットの世界と関わることになってからの私のハンドルネームはずつとk o aだった。『核』という意味で、なんとなくつけた本名とは全く関係ない名前。だけど、10年以上も使っていれば愛着も湧いてくるもので、もう一人の自分のようだった。

でも、k o aは現実の私と同じ。自分は自分でしかなくそれ以上でもそれ以下にもなれない。消極的で自分自身を移した分身に過ぎないのだ。

積極的に行動できずに、フアリイでの友人は相手から申し込まれた三人しかない。フアリイでしていることは、時々日記を書いているだけ。そんな私のどうしようもない日記に藍はよくコメントをくれた。だから、彼に興味を持って彼の日記を読むようになった。彼のある日の日記を読んで、随分攻撃的な人だなと感じた。正直、関わりたく無いと思った。けれど、別の日の日記を読んで、イメーシはがらりと変わった。

繊細で純粹、傷つきやすい心を持った人。彼をただただ好きだと思った。その感情は特別な色も無い軽い気持ちでの好き。

本当の意味で、彼が彼女と幸せになって欲しいと思ったのは、この時からだった。

永遠の愛の存在を信じる彼。愛する人と結婚し最後まで添い遂げると強く願う彼。

彼の何を知っているといえ、何も知らない。ただ、真剣に誰かを想っている彼が眩しく思えた。彼が愛している彼女と幸せになれることを願った。彼が誰かを真剣に愛して幸せになって欲しい。

そんな彼が、愛する彼女とよりを戻し、そして結婚すれば……希望の星っていう言い方は青春っぽくて恥ずかしいけれど、自分の人生にも何か希望を見出せる気がして、彼と彼女との関係の進展が、私の一縷の望みになった。

だけど、この時の彼との関係は希薄で、彼は私がこんなことを考えていることなんて何も知らなかった。彼は私の日記にコメントをしてくれたことはあったけれど、私が彼の日記にコメントをしたのは一度だけだった。

親しくも無いコミュニティサイト内での友人で、たいした繋がりじゃない。

それでも、書かれたコメントにコメントを返して、知らず知らずのうちに私の中で彼の存在感が大きくなっていくのがわかった。

第2章

彼が消えた。

胸に生まれた喪失感は軽すぎるものではなかった。

ネットの世界では、簡単に誰とでも出会える。と同時に簡単に別れはやってくる。そう、わかつてはいるけれど、喪失感を感じるなという方が無理だ。いや、彼を失ったことは、他とは違う。

今まで幾度もネット上で出会いと別れがあつた。でも、彼との別れは何かが違った。

そのショックを受けて数日後、彼らしき人からメールが届いた。ニックネームが違って彼かどうか分からなかったが、プロフィールを見たら、彼のような気がした。

彼だと明確に判断できるものは無かつたけれど、インスピレーションで彼だと感じた。だから、

ところで、本当に『初めまして』なのでしょうか？

その言葉を付け加えてメッセージを送った。

やっぱり彼だった。

嬉しくて、でも、恨みがましくもなつてこんなメッセージを送った。

こんにちは、koaです。

インターネットの中の繋がりで薄い関係かもしれませんが、出会いがあつて何時かは別れが訪れるものとわかつているけれど、藍さんがいなくなる度に寂しい気分を味わっています。

でも、今、藍さんがとてもつらい時期で心が不安定なのかなと心配もしています。

藍さんが彼女のことと悩んでいるのを知って、がんばつてと軽々しく言えるほど、あなたのことを知りませんが、お二人の恋愛がうまくいけばと心の中では応援していました。

ただ、藍さんが幸せになることをお祈りしています。

このメッセージを送ったら彼から意外な返事がきた。

彼の方から携帯電話とメールアドレスを教えてきてくれたのだ。驚いて、嬉しさがじわじわとやってきた。

けれど、現実で繋がることに戸惑いがあった。彼を信用しても大丈夫かどうか分からなかったのだ。

結局、ネット上での彼の言葉からは信頼するに値すると判断して、彼に連絡先を教えた。

ただ、この時の判断が正しかったか、今でもよくわからない。

第2章（後書き）

小説を投稿したことをすっかり忘れていて、慌てて投稿しました。

第3章

彼とメールを交わすことはドキドキした。

久しぶりのトキメキだった。

二年前から始めたお見合は散々だったのかもしれない。結婚するという結果が出ていないのだから、『だったのかも』なんてはつきりしない言い方は避けた方がいいのかもしれないが……。

最後に人を好きになったのは、20歳の頃。それから9年経った。どうすれば人を好きになれるのかわからなくなっていた。恋愛の仕方を忘れてしまった。どうやったら本気で人を好きになれるか真剣に悩んだりした。

でも、人を好きになれる方法なんて無かった。その人に出会えば自然と好きになれるものだ。好きっていう感情は、頑張つて努力して得られるものではない。そんな簡単なことを忘れていた。

このことを思い出させてくれたのは、まだ会ってもいない言葉を交わすだけの藍だった。

初めて会話した日からどんどん惹かれていった。彼に対しての好きという気持ちは、変化しつつあった。この感情の変化は私に戸惑いを与えた。

何もかも諦めて結婚する意志を固めていたのに、好きになりそうな人に出会うなんて……。結婚に対して迷いが生まれた。

やはり彼とはタイミングが悪い気がする。

私は結婚には何も期待していない。愛せる人に出会えても、その人が同じくらいの想いを返してくれる。そんな奇跡があるだろうか。そんなこと、私自身に起こりえるとは思わない。

永遠に続く愛なんて無い。だから、嫌いじゃない人と結婚すれば、

最後まで添い遂げられると思う。好きにはなれなくても、嫌いじゃないなら一緒にいるのも苦痛にはならないだろう。そう、考えていた。

彼に自分からメールを送信するのを控えるようになった。それは自分の無意識の防衛だと気付いたのは、彼からのメールを心待ちにしている自分を認めたときだった。だんだん怖くなった。彼へと向かう自分の想いが恋愛感情に育ってしまう予感が心の何処かにあったのだろう。

けれど、いつのまにか芽を出した感情は、水や栄養を与えなくてもすくすくと育ってしまっていた。

いったん自分の感情を認めてしまうと、今までこの感情に気付かなかったことが不思議でならない。

この感情を消すことが出来ないのは、自分には一番良くわかってる。もう、退くことは出来ない。前に進むしか道は存在しない。

実際、会ってもいない人に本気で恋愛感情を持つことが出来るなんて思っても見なかった。

でも、有り得ないことではなかった。

私の今までの恋愛は、人の内面に惹かれてから恋愛感情に発展するパターンだ。

ネットで知り合った人と、メールを交わすうちに好きになることはあるかもしれないと思ってた。有り得ないことではないと思っていたからこそ、一番恐れていたことでもある。

自分が結構惚れやすい性格だと自覚している。

この恋愛は自分の人生に黒い染みを落とした。

第4章

この恋にかけてみようと思う。絶対に上手くなっていけないと思う。

確実に、人生の回り道になるが、最後だと思っから彼に会いたいと思う。

自分から彼に会いに行くことを決めた。

自分の住んでいる所から、他の県への一人旅なんて初めてで、尋常ならざる緊張感でいっぱいだった。旅行の荷物の準備、交通手段の手配、それだけでぐったりしてしまった。無事に行って帰ってこられるだろうか？

旅行の不安で頭がいっぱいではばらくは何も手がつかなかった。

旅行の当日、旅行鞆を片手に家を出た。無事に辿り着けるか不安しかない。

バスに乗り、電車に乗りひとまず、乗り換えまでは少しは落ち着けるだろう。乗り換えが上手くいくか不安なのだが、初めて乗る新幹線が楽しみでもある。

電車から見る景色はある地点からは始めてみる景色に変わる。見知らぬ景色だが、見える景色は自分の住んでいる所となんら変わらないものだった。日本国内の移動ならそんなものなのかもしれない。地続きの移動に過ぎない。そんなに不安になることは無いだろう。そう自分を落ち着かせようと思うが、昂揚感もあって落ち着いてなんかいらなかった。

特急から新幹線に乗り換えるのに、少し待ち時間があつた。ホームの椅子に座り、見るともなしに景色を眺める。しばらく旅行のことばかり考えていて、藍のことを考えていなかった。

このまま進んでいいのだろうか。立ち止まって冷静になると、自分が愚かな行動をしているのではないかと……。

私は乗るはずの新幹線を見送った。

第5章

わからなくなってしまうた。

自分の気持ちを伝えたいというそれだけで、彼に会いに行つてしまえば、彼は迷惑に感じるだろう。

自分の気持ちにけじめをつけ、振ってもらう為に会いに行くのだ。会いに行かなくても、振ってもらうことは可能なのだ。会いに行くのは……会いに行く……どうして会いに行こうとしたのか？

ただ、会いたかった。

彼の笑顔が見たかった。

あなたが好きだと伝えたかった。

会いに行くにしても、気持ちを伝えるにしても、今はその時じゃないだろう。

苦しんでいる彼に、気持ちを伝えることは出来ない。

彼は今、彼女とは上手くいっていないらしい。別れているのか、付き合っているのかは、はっきりとは聞いていない。けれど、彼女のことで彼が傷ついているのはよくわかる。

今、大切なのは、私の気持ちを優先することより、彼をそつと見守ることだ。

愛情の深さと比例して彼は傷ついているのだろう。

彼女を愛した3年間。

どれほどの苦しみか私には想像がつかない。

頑張れとも言えないし、諦めるとも言えない。ただ、時が経ち自然の流れに任せるしかないだろう。彼の心の傷が癒されるのを祈るしかない。

私は彼に何も出来ないのだ。

話を聞くことも、慰めることも、ただ側に居ることすら出来ない。彼にメールで励まそうと思ったけれど、何と書いていいのかわからなかった。

次第にメールは途絶えがちになった。私のメールが彼の負担になっているような気がして、こちらからメールを出すのをひかえるようになった。それだけじゃない。これ以上彼と言葉を交わして自分の感情を育てるようなことはしたくなかった。

彼に言われた「一生の友達だ」。この一言は、私に突き刺さった。一瞬言葉が出てこなかった。でも、これは彼との連絡が途絶えても、繋がっていられると信じてもいいと言われているような気がしたのだ。

第6章

彼と音信不通になった。

次のお見合いの話がきていたけれど、どれも決まらず3ヶ月が経とうとしていた。

そのころには藍さんへの気持ちの整理はついた。この3ヶ月、中国語を勉強する気にはなれず、何も考えたくなくて、小説ばかり読んで現実逃避をしていた。

何度も何度も彼にメールを送りたい衝動に駆られたが、結局彼に伝えようとする気持ちは言葉にならなかった。

久しぶりに誰かを好きになって、自分の中で少し変わったことがある。

投げやりだった。自分の人生どうにでもなれと思っていた。

私と結婚してくれる奇特な人が居るなら、私の気持ちは押し殺して結婚に応じるつもりだった。

今までだったら、相手が望めば誰とでも結婚するつもりだった。

唯一の条件は生理的に嫌悪を感じない人。でも、これからは真剣に向き合おうと思った。

結婚に対する気持ちは投げやりだったけれど、お見合い相手との付き合いはいい加減にしてきたわけじゃない。自分なりに出来ることは一生懸命にしてきた。それでも、お見合いは上手くいくことは無かった。自分の中のどうでもいいという考えは相手に見透かされていたのかもしれない。

失恋して初めてのお見合いに臨んだ。

お見合い写真も見ず、プロフィールも見なかった。自分の見たこと、聞いたことだけを頼りに相手と接してみようと思った。相手と接して感じたこと、それが一番大事なことだろう。相手が自分をど

う思っているか推し量ることをせずに、自分の気持ちを大切にしよう。自分が相手をどう思っているか、それが一番大切なのだと思う。

九回目のお見合い相手、田畑祐司とは、序盤それなりに上手くこなした。

お付き合いに発展し、まともなデートはしたことが無かったけれど、彼とは一晩を過ごした。

避妊もせずに、拒まなかったのはSEXへの好奇心と、やはりどこかどうにでもなれという投げやりな自分だった。結局、そう簡単には自分は変わらないのだろう。

彼とのSEXは自分がいかに冷めていたか、冷静でいられたことが不思議でならない。気持ちよさなんて一つも感じられなかったのは、私の体の問題か、気持ちの問題か。

それにしても、自分が好きでもない相手と寝られる貞操感の無さが痛かった。

正直、妊娠したら責任とってもらおうというより、堕胎させてもらうという感情が優先している。彼には恋愛感情が無いけれど、結婚してもいいと思う。ただ、SEXはしたくないし、彼の赤ちゃんが欲しいとは思わない。彼と自分の間に生まれた子供を愛せる自信は無い。

お互い何も知らない。結婚してから、お互いのことをじっくり分かり合うことも出来るだろうけど、少なくとも私の方は、結婚前に将来自分の夫になるであろう人とは話しておかなければいけない過去がある。

気持ちが無いのに、お互い心を通わせる前に体を繋げてしまった。このことをはつきりと自覚した途端、私は彼に心を開けないだろうと悟った。

メールには下ネタ満載でそれが気持ち悪くて、返信するのも嫌になった。一緒に行く約束をしていた花火、その後彼の家に泊まるのが嫌で、約束をキャンセルした。

その後、一度食事したけれど、話しているのも疲れた。誕生日に会いたいと言われたが、自分の誕生日はもう大体予定を立ててしまっていたので会えないかもしれないと言っておいた。

誕生日の前日にメールで会えないと送ったら、別れを切り出された。そのメールは私が浮気していると決め付ける内容で、ナイフで切りつけるような言葉の暴力だった。

実際には浮気なんてしていなかったから、そんな二股かけるような人間だと疑われた時点で付き合っではいけないと思った。正直、田畑さんを愛してはいなかったし、藍さんへの想いがあったから二股していないとはいえないけれど、不誠実だったことは認めるしかない。

謝罪をこめたメールを返信し、別れを了承した。すると、手のひらを返したように友達で付き合っていこうとメールを返信してきた。一度出したメールは相手が消さない限り残っているわけで、あんなメールを送りつけておいて、友達で付き合っていこうなんてメールを送れたなど、彼の思慮の浅さに苦笑するしかなかった。

無理だと思う。彼には時々話を通じないときがある。彼を理解しきれないし、彼には私を受け入れる度量の大きさは無い。

このことが決定打となり、関係を終わらせることになった。

第7章

藍さんに嫌われた。

彼にアクセス拒否をかけられ、彼のスペースにアクセス出来なくなり、メールの返事もこなくなった。

全てがどうでもよくなり、中国語検定の試験さえも放棄したくなった。試験勉強もやる気が無くなった。

それでも、なんとか自分を鼓舞して試験は乗り切った。

けれど、試験が終わった後は、不合格確実だったので中国語を勉強することを止めてしまおうと考えた。関わりたくなかった。彼との連絡さえも全部絶ててしまいたかった。フアリイを退会して、携帯の番号も変えてしまおうと思った。

何度も彼に送ったメール、彼から送られたメールを消してしまおうと思った。

でも……できなかった。彼には嫌われたけれど、彼と交わした関係を全て無にすることは出来なかった。

躊躇い無く過去を消去してきた私だけけど、もう自分から何かを捨てたくは無かった。例え、彼との連絡が途絶えても、彼と交わした言葉は消えたりはしない。消したくは無かった。

彼からメールが来た。

惚れた方が負けなのだ。

彼から貰ったメールを受け入れた。彼の存在を許した。

謝りもしなかった彼。私を傷つけておいて苦しませておいて……それでも彼に何も聞かずに受け入れたのは、決して彼をどうでもいい存在だと思ったわけでもなければ、彼に同情したわけでも無い。ただ、受け止めてあげたかった。彼の私に対する憎しみや苛立ち、そういう負の感情をぶつけられても、彼を支えてあげられるならそれでよかった。

自分から捨てたくなかったのだ。例え、捨てられても、もう誰かを自分から手放してしまうのは嫌だった。傷つけられてもいい。ただ、誰かを抱きしめてあげたかった。傷ついた心ごと……。それでどんなに自分が傷つこうが、誰かを傷つけるのはもう嫌だった。

終章

映画を見た。

日本人が書いた小説の映画化。ファンタジー要素が入った不思議で暖かい物語。

横にいるのは新しいお見合い相手、遠藤春朋。

見ていて、突然藍さんのことを思い出した。

一瞬、泣きそうになった。

彼を思い起こさせるような何かがあったわけじゃないけれど、胸がざわついて……周りに誰もいなかったら泣き出していただろう。

彼を思い起こすのはきつとこれが最後だと思う。もう終わったと思っていた恋は、あの瞬間、本当に終わった。

彼のことを思い返してみても、ふと気付いた。

彼とメールを始めたのは1年前だということを……。

たった1年。確かな何かがあったわけじゃない。

でも……

でも……

消せない時間。

さようならは告げなかった。

明日また

そんな言葉で終わった関係。

きっともう連絡は来ないだろう。

それでも

また明日。

終章（後書き）

このような形式で書いたものを小説とっていいのかよくわかりません。

独白のみで語られているのは、自分自信が誰にも話せないことを吐き出した感情を、アレンジして小説に仕立ててみたからですが…
…小説なのかなと自分でも悩んでしまいました。

作中に書けなかったけれど、一度だけでもいいから紗柚は藍の心からの笑顔が見たかった。その笑顔を見られるだけで、残りの人生一人でも生きていけたらと思ういます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9075l/>

現のち夢ときどき架空 うつつ のち ゆめ ときどき から

2010年10月8日14時33分発行